
いつかみた夢

藤里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかみた夢

【Nコード】

N1155T

【作者名】

藤里

【あらすじ】

夢の記録と掌編小説のまとめ。

拝啓、屋上より

うちの学校は屋上への階段がない。

高校にあるまじきことだ、と常々思う。

階段が見つからないために校舎の屋上に上れない。

これは重大な損失だ。青春への冒涇だ。

屋上への階段がどこにあるのかは分からないが、校舎4階の隅にある書道室の天井裏に屋上への階段が隠されているのではという噂がある。

だったら書道部に確かめれば良いことだと思われるかもしれない。しかし、ものは他ならぬ屋上への階段だ。もしその噂が真実だとしても、そうやすやすと教えてくれるものか。それどころかひよつとしたら秘密を守る書道部として、知ってはならないことを知ってしまった者を闇へと葬る任務とかを担っているかも知れない。

その話をする度、あいつは笑ってこう返す。

「だったら君、いつもどうやってここに来てるのさ」

探偵未満と死神少女

「名探偵たる能力は充分すぎるほど充分に持っているのに惜しいかな、貴方には事件が足りない。貴方に決定的に足りないものは事件。事件事件事件、それが貴方の目の前にありさえすればたちまち名探偵が一人出来上がるというのに、全く嘆かわしい。どうして名探偵の行く先行く先で必ず事件が起きるとお思いですか？それは名探偵とはそういうものだからです。名探偵とは死神の別名。名探偵が名探偵たる第一条件、それは事件と遭遇すること。事件なしに名探偵は存在できない。事件に遭遇しない名探偵など存在しえない。名探偵はかならずその場に居合わせなくてはならない。ただの探偵と名探偵、この差は歴然としています。探偵ならばただの職業、しかし名探偵とは称号です、名探偵とは烙印です、名探偵とは宿命です、名探偵とは因果です、名探偵とは果報です。魔王がいない世界で勇者になることはできません。勇者というのは魔王がいて初めて存在できるというなんとも皮肉な存在なのですよ。魔王は勇者がいなくても存在できませんが、勇者は魔王がいなければ勇者たりえませんが、勇者と魔王は一方的に不可分です。同様に名探偵つまり貴方に必要なのは名探偵が登場するに足るだけの資格を持った事件です。惜しいかな、貴方には事件が足りない。しかし僥倖なことに私のほうには事件は有り余るほどあるのです。だから、

私が貴方を名探偵にしてあげましょう、貴方の意思には関わりなく」

宙を泳ぐ魚

魚は宙を泳ぐもので、水に入れるとたちまち死んでしまうくせに、水のあるところに集まりたがるという難儀な性質を持っている。だからイルミネーションの淡い光を灯す水槽の上などは通勤ラッシュ時のような大混雑で、水の上を占領しようと押しあっているうちにうっかり水の中に飛び込んでしまったものは、びちびち跳ねてのた打ち回った拳句に大抵溺死してしまう。

元来魚は水の中を泳ぐもので、それがどういう経緯で宙を泳ぐようになったのかは知らないが、当の魚たちはどこまでも水の中を泳いでいるつもりらしい。物理法則や己の体の構造といったものを一切無視して、暢気にすいすいと宙を泳いでいる。

現在ではもう、水の中を泳げる魚はこの世界には存在していない。海を忘れた魚たちは、太古の姿を宿したままで宙そらを手に入れた。しかし、果たしてそれは幸せなことだったのだろうか。

むかしむかし、あるところに

むかしむかし、あるところに一人の貧しい少女が住んでいた。

お決まりのフレーズと設定で始まる童話の絵本は私の見た事のない表紙で

少女の母親は病気がちで臥せており、

虚構の物語のくせに現実を侵食してしまうほどの存在感を放っていた。

日々の生活にも事欠くほどだった。

私はただの読者なのに、まるで近くで見ているような。

少女は勿論、貧しい暮らしに満足してはいなかった。

”だってそうでしょう？うちには病気の母親だっているんだもの”

私を置いてきぼりにして、物語が勝手に進行していく感覚。

ある日少女はいつもの通り、水を汲むために家の近くにある井戸へ出かけていった。

その帰り道に、一人の老人に出会った。

老人は道端に座り込んで、たまに通る人を眺めているようだった。近隣に住んでいる顔ではないから、きっと物乞いの類なのだろうと少女は判断した。それにしても妙に小奇麗な格好をしているけれど、少女は気にもしなかった。

水のはいつた桶をぶら下げて前を通り過ぎようとした時、老人が少女に声をかける。

何と言ったのかは、私にはよく聞き取れなかったけれど。

少女は老人を一晚家に泊めてやる事にしたらしかった。

本当に、ただの親切心から。

少女は老人を家に連れて帰り、心ばかりの料理を、しかし貧しい少女に取っては精一杯のご馳走を振舞った。

次の日の朝、また少女は水を汲む為に近くの井戸へ出かけた。

老人も一緒に家を出た。このまま何処かへ行くつもりだと言って。

誰もいない田舎道を二人で歩いていると、老人は少女に一晚泊めてくれた礼だといって幾らかの金を渡した。

少女は、渡された金額に驚いた。一晚の礼にしては多すぎる額だったし、何より物乞いのように道端に座っていたこの老人が、そんな大金を持っているとは露ほども思わなかったから。

そして少女は思う。

この老人はどういう訳か金を持っている。

金。魅力的なもの。

それさえあれば、今の貧しい暮らしも少しはましになる。

私は持っていない。

目の前の何処の誰とも知れない老人は持っている。

” だったら、殺して手に入れればいいじゃない ”

少女は路傍に落ちていた石を拾い上げると、背を向けた老人の頭へ渾身の力を込めて叩きつけた。

私はそれをじっと見ていた。目の前で起こる惨劇に、手出しも口出しも出来ないまま。

それは絵本の中の出来事なのだから。読者の私には届かない世界。

ページもめくらずに、じっと、それを、見ていた。

赤い血が飛び散る。飛沫が少女の手を染めると、漸く少女は自分が何をしたのか気づいたように石を手放す。

赤く染まった石が地面に落ちて鈍い音を立てた。老人は倒れたまま、動かない。血に赤黒く染まった筈の白髪が、血の色とは違う黒さに変わっていく。

頭から血を流したまま、今にも息絶えそうな年老いた男が美しい顔をもつ青年に変わっていく。

驚きのあまり立ち尽くす少女の目の前で、青年は目を開いた。

”ああ、私は何て事をしてしまったの”

嘆く少女の涙が青年の頬に落ちた。

呪いはそれで解けるはずだった。

はず、だった。

耳障りな笑い声を上げながら、黒い髪の美しい青年は、少女を見る。

頭から血を流し、美しい顔の額にも赤黒い血をつけたまま、地面に倒れ伏したまま、血走った目で少女を注視する。

暖かい寢床をありがとう。

でも残念だったね、美しいお嬢さん。

無償の親切だったなら貴方は望むものを全部手に入れられたかもしれないのに、ここに至ってあなたは自分の欲を優先した。

そんな涙で呪いが解けるはずはない。

恐怖に後ずさる少女に向けて、青年は言った。

”逃げてでも無駄だよ、何度でも生き返って何度でも会いに行く”
そうしてまた、耳障りな笑い声を上げた。

逃げていく少女の背が見えなくなる頃、青年は漸く笑いを止めた。
そうして薄れてゆく意識の中で、夢を見ながら死んでいった。

呪いをかけられたといえば、王子と相場は決まっている。

青年もその例外ではなかった。

ただ、呪いを解いた相手と結ばれて幸せになるというお決まりは、
果たされなかったけれど。

青年は生き返らなかった。

温かい寝床を夢見たままで。

少女は家に逃げ帰り、貧しい暮らしを続けた。

病気がちな母親は数年後に死んだ。

少女は、二度と王子の顔を見る事はなかった。

物語はこれでおしまい。

ラプンツェルの白い塔

とても鮮やかな色彩のくせに何もかも全てがぼんやりとした世界の中で、ただひとつ、その一点だけピントが合ったようにまっ白な塔が存在していた。

足元の黄土色をした泥から次々に白い蛆が這い出してきて、私の足によじ登ろうとする。

柔らかい肉の部分までよじ登るとすぐに皮膚の下に潜り込もうとするので油断が出来ない。

塔の上からはラプンツェルの髪のように一本のロープがぶら下がっていて、一見それは3本の太い蔓を三つ編みにして作られたもののように見える。しかしよく見れば一本の木から削りだされたものだ。塔と同じく、どこまで続くのか分からないけれど、ずっと高い所まで繋がっている様に見えた。このロープをつたって登ってこいともいわんばかりに。

ここまで一緒に来た、名前も知らない、顔だけは何故か知っている「彼」は、このためにここにきたのだろう。躊躇いもせずロープをつたって器用に塔を登っていく。

私は何も言わずに見送った。

その姿はどんどん小さくなり、やがて見えなくなった。

足を汚す泥も、私を内側から食い荒らそうとする蟲も、もう気にならない。

ただ、天まで伸びる白い塔を何時までも、何時までも見上げていた。

周りには、名も知らない、ただ顔だけはどうしてか知っている人たちの死体が大量に転がっている。

皆幸せそうな顔をして、蛆に食われ足元の泥にかえるのをを待っている。

私は知っている。彼は何時かあの高い塔の上から落ちてきて死ぬことを。

そしてまた、何処からか同じ顔をした彼がやってきて塔を登るのだ。

林檎と兄妹

庭の木に林檎がなっている。

丸くて大きい林檎ではなく、品種改良される前のような小さくて形も歪な、林檎のような実。

本当に林檎かどうかはわからない。けれど、多分みんな林檎だと思っていた。

私はこの庭の住人。林檎を盗んでいこうとする者がいるので困っている。

別に、人にあげるのが嫌だというわけではない。ただ、盗んでいくという行為が嫌なのだ。言ってくれればそんなものはいくらでもあげてしまうのに。

林檎の木はとても立派で、たくさん林檎は私一人では食べきれない。それも、丸くてつやつやした真っ赤に熟れた甘そうな林檎ではなく、形も歪で痩せていて甘くもなさそうな林檎だ。とてもおいしそうには見えない。

それなのに、どうしてか皆盗みにくる。

ある晴れた日。

女の子が来た。女の子はすぐに帰った。

次に、男の子が来た。男の子は、妹が病気で、林檎が食べたいと言っから庭の林檎を譲って欲しいという。

別に、そんな理由がなくても、ただ欲しいと言えばあげるのに。いいよ、好きなだけ持って行きなと言って庭を見ると、さっき来た女の子が林檎を盗んでいた。その女の子は、男の子の妹だった。病気というのは嘘で、男の子が話をして気を引いているうちに林檎を盗むつもりだったらしい。

そんな作り話をしなくても、欲しいと言えばあげるのに。

そんな小細工をしなくても、欲しいと言えばあげたのに。

余計なことをしたお陰で、兄妹は林檎を手に入れそこなつた。

ふと思いつく。こんな木は、切ってしまえばいいのではないかと。
今日も私は、林檎泥棒への対処で忙しい。

植木屋

冷凍庫に保存しておいた、死んだ人の顔（原形をとどめていない物もあつたが、学校の友人がある程度修復してくれた。こういうことは得意なのだそうだ）が何枚もお面のように並べて入っている平べったいお菓子の空箱と、本と、その他の学校の荷物を持って実家を出る。

駅へ向かう道をまっすぐ進むと、船に乗れる。あそこまでは新幹線で行くより船で行った方が遥かに安くて早い。

あそこ。

デイズニールランドのような夢の国。でも、その中にはコンビニもあれば家もある、普通のマンションだつて建っている普通の住宅地と変わらない。

入り口は二つあり、一つは通常の入り口。こちらは入るときにもアトラクションが用意されている。もう一つが、体調の悪い人用の入り口、らしい。何処かのショッピングモールのような出で立ちで、入るとすぐにコンビニがある。どちらも入場券が必要だ。

通常入り口前には、この前起きた事件のせいで警察がこつた返していた。

もう一つの入り口前には一人見張り役の警官がいるだけで、気分が悪いのですが、と言うとあっさり通してくれた上医務室の場所も教えてくれた。

別に嘘は言っていない。気分が悪い事に変わりはない。

この前起きた事件。

私もその場にいたのだ。

その時も、彼に用があつた。箱に入れた死体の顔を持って、彼に会うべく通常入り口から中に入った。

アトラクションは数人のグループひと塊で楽しむ事になっている。それが他人だろうと関係ない。私の時は、二人の知らないお姉さん、知らない男の人、そして私の四人だった。そして、男の人が殺された。

関係者は全員追い出され、仕方無しに私は帰省した。

・・・顔の入った箱を持ったままで。

入り口から入って直進、ずっと道を進んだところに庭園がある。

ドーム型に渡した鉄筋にガラス張りの植物園の中に、黒い服を着た瘦せていて背の高い、検死官・プロファイラー・探偵・霊媒師・死霊遣い・・・？どれだか分からない。けれど、とてもどれとでも取れる感じの男の人がいる。最後の死霊遣いと言うのは言い過ぎかもしれない。少なくとも死霊を操っている現場を見た事は無いのだから。しかし、少なくとも霊媒師くらいは言ってもいいだろう。死体を見て魂がどうこうと言っていた事はあるし、所謂幽霊のようなものもその気になれば見えるらしい。そこに住んでいるのかどうかは分からないが、いつもその場所にいる。見た目は若そうだが、実際の所は若くても20代後半だろう。

初めて来た時は私一人ではなく、学校の友達と一緒にだった。ガラス張りの癖に薄暗い植物園の中で、いきなり機械で出来た巨大な蜘蛛みたいなものをけしかけられた時は驚いたが、彼にしてみれば単なる悪ふざけだったらしい。

彼は頼れる人だという事を、今の私は知っている。

途中で何度か、片手にスポーツドリンクのボトルを持ったジヨギング中の女の人や、自転車に乗った人とすれ違った。マスコットキャラのぬいぐるみもそれらしい建物も、ポップ・コーンを売っている露店すらも見当たらない。一体何処が夢の国だというんだ。

庭園に入ると左手にあのときの機械蜘蛛が座っていた。人が入ってくるのを見て一瞬立ち上がりかけたが、私だと分かれると安心したように動きを止めた。ハリウッドの映画に出てきそうな機械だと、見るたびいつも思う。

何処にいるのかと見回してみると、右側に少し入ったところで逆立ちをしながら本を読んでいた。相変わらず意味の無い事をする人だ。

「こんにちは」

逆立ちをしたままの彼に声をかけた。

こちらに気づくと流石に逆立ちはやめて、私にその前にある椅子に座るように勧めた。テーブルの上には冷め切った紅茶が置いてある。一体いつから逆立ちをしていたのか。

私は立ったままで持ってきた箱を手渡した。彼はそれを受け取ると、すぐさま蓋を開けた。平気な顔で中身を見て、また蓋を閉じた。

そして、語り出した。

彼女の話

朝の通勤ラッシュ時、それなりに混むあつ電車の中、二人の女の子が並んでいた。近くの公立高校の制服を着ている。

片方の女の子は蹲ってしまい、顔が上げられずにいる。隣のもう一人の子とは、どうやら仲が良いらしい。

蹲った女の子は、しかし目は閉じていない。

蹲ったままで目の前に見えるのは、サラリーマンのものらしい足。1つはきちんと地面に立っているが、2つめが地面から浮いている。それが何かにぶら下っているように、電車の揺れに併せて動くものだからどうしても視界の隅を行ったりきたりすることになってしまい、動物の本能としてその動きを目で追ってしまいそうになる。同時に、そっちを見てしまいそうになり、見ては駄目だと自分に言い聞かせている。

もう片方の子には死人の存在は見えていないらしく、周囲も同様のようだった。

ただ、隣の女の子だけは何を怖がっているのか分かっているようなのに、全く頓着する様子もない。

そうしているうちに駅に着いた。そちらを見ないようにして電車から降りようとすると、いきなり髪を捕まれぐい、と引っ張られる。3人目が網棚の上にあったのだ。振り切つてホームに逃げると、それから3つはそのまま電車とともに次の駅へいつてしまった。ついてくる類のものではないらしい。

けれど女の子はそれからもずっと怯えていた。家から一步も出なくなり、家の中でも座椅子2つで壁側に小さな囲いを作りその中にぴったり収まるようにして蹲っていた。

あんまり小さくなっていたものだから、女の子の身体はだんだんと縮んで手乗り猿のような大きさになり、姿もそのように 毛が

長く、目が大きい猿のような姿になった。賢くて大人しいが、臆病で人間らしい思考はあまり残っていないらしい。

それはそのあとどうなったのかと私が聞くと、彼女はそこにいるわと言って部屋の隅においてあるケージを指差した。

箱詰薄闇と喫茶店

「あなたには、彼に会ってもらいます」

それがよく知った喫茶店の店員であつても、いきなりそんなことを言われれば誰だつて戸惑うはずだ。そのひと　　ひと？黒い猫の耳がついていてるっていうのには？　　は一枚の、歪な形をした紙を私に手渡す。

「丁度いい、その箱を使いましょう」

目の前には友人と食べようと思つて持つてきた菓子入りの白い箱がある。平たい箱の表面は真っ白で、大きさは大体ノートを一回り大きくしたくらい。

「紙に、あな　と書いてください」

書くものがなくテールの上を見回すと、ボールペンが立ててあつたので使わせてもらうことにした。言われた通り、紙に「あな」と書く。

「開いてください」

何を？あ、箱か。

両手で蓋を持つて持ち上げると、蓋が抜け切れずにちよつとだけ中身も一緒に浮き上がつてそれから自重で下に落ちて、かぼんと軽い音を立てた。紙に何か文字が浮き上がっているのが視界の端に見える。

箱の中には何も無い。箱の底が見えない。ただ真っ暗と評すほどには暗くない、薄闇が箱の中に　　いや、箱から繋がっているのだらう、きつと。

そう思つたとき後ろから、どんつ　と軽く押され、私は箱の中に突き落とされた。

箱は自らの意思でも持つているように私を頭から飲み込む。落ちたはずなのに、私の足近くまで飲み込んだ頃には既に上下が逆転していた。私の足はしっかりと地面についたまま。息が出来ないので

はないかと心配したが、そうでもないようだった。少し苦しいけれど、その点にだけは安堵する。

そうしているうちにどこから声がある。何を言っているのか私は理解している。心地良い重さとスピードで声は語り続ける。

その声が止んだと思ったら、私はどこか知らない屋外にいた。競技場らしい緩やかにカーブを描く白く高い壁が横手に見える。遠くには夕焼け、けれどももうここは闇。目の前には箱を持った少女が立っていた。

「ここはx」

色素の薄い髪をした少女はそう言うと、私の頭に箱を被せた。

ここではないのか、と大人しくされるがままにした。

再び息苦しい薄闇に飲まれる。声。声は先程の続きを語ってくれる。

またその声が途切れ、私は違う場所に立っている。目の前には箱を持った誰かがいて、「ここはx」と一言だけ発すると私の頭に箱を被せる。その場所は例外なく誰もおらず、広い野原だったり、学校のような建物の中だったり、コンサートのホールだったり、公園だったりした。遠くには夕焼け、けれどここはもう闇。

それを何度も繰り返し、闇の中の声が語る話も結論に差し掛かっていた。そのときまたしても私は知らない場所に放り出された。

そこは喫茶店だった。

向かいには箱を持った誰かではなく、友人が座っている。

第一声は、「ここはx」ではなく「どうしたの、ぼんやりして」だった。然程心配でもなさそうに聞いてくる。ぼんやりするのは私の常だ。

私は、最後の最後を聞きそびれたことに落胆した。

注文は既に済ませているようだ。私は何を頼んだのだろう。

テーブルの傍らには並々と水を湛えた金属の鍋のようなものが置いてあった。不思議な形をしていて、中国かどこかの古い鍋に似ていた。手を翳してみると、暖かい。

「私、この店来た事あるかも」

「え、そうなの？初めてだと思ってた」

夢の中で見た事があるだけかもしれない。呼び出しブザーに木彫りのハンプティ・ダンプティが腰掛けていて、ボタンを押すと転げ落ちる辺りなどそっくりだ。カウンターの向かいに座っているのが巨大な鼻というのにも見覚えがある。

注文がなかなか来ないので他愛無い会話をして時間を潰していると、窓の外に制服を着た女の子が見えた。アパートの2階に住んでいる人物が目当てらしく、寄り集まっては嬉しそうにはしゃいでいる。窓に隔てられて声は聞こえない。あれが追っかけというやつなのだろうか。よく分からないけど。窓から視線を戻すと、

「こちらご注文の品です、お待たせして申し訳ありません」
と友人の前にコーヒー、私の前に紅茶が差し出される。

その手の主は見覚えのある顔だった。猫の耳はついていないが見忘れるはずもない。整った顔に笑みを浮かべて宣言する。

「さて、彼に会いに行きましようか」

箱詰薄闇と喫茶店（後書き）

これには少し背後設定（というのも夢の中の記憶なのですが）がありまして、「私」が箱を通じて行く世界は平行世界ということになっています。

分かっている設定は以下の通り。

- ・ どれか一つの世界を見ているとき、他の世界については夢として処理されている
- ・ 実際に行き来しているわけではなく、記憶を引き継いだ「私」という意識が覚醒するだけである
- ・ それぞれの世界には多少姿が違う場合はあるものの同じ人間がいて、記憶は共有していない

浮遊

その日も私はぼんやりと空の散歩を楽しんでいた。目的はない。

夜中だというのに町には沢山の人が出歩いている。

しかし、私を見て驚く人は誰一人としていないし、考えてみれば出会ったことも無い。

当然のこととして受け入れられているか、或いは見えていないのだろうか。

私は幽霊の類ではないが、この状態のときはそれに限りなく近い存在なのかもしれない。

私が彼女を知ったのは一体いつのことだったかは明確ではない。

気付けば私は彼女を知っていた。

気付けば彼女は私を知っていた。

実際に会ったことはない。意識が繋がっている、とでもいうのだろうか。互いに特殊な能力を持ち合わせていた訳ではないから、恐らくは偶々繋がってしまっただけなのだ。他者の考えていることが読み取れたことは、少なくとも私には一度もない。

彼女とは明瞭に会話ができるわけではない。だが、物語でも読むように互いの考えていることを読み取ることはできる。

私は飛べる。けれど、彼女は飛べない。

私は鴉で、彼女は人間なのだから。

「私も飛べたらよかったのに」

「そうすればこの牢獄から抜け出せるのに」

「あなたが羨ましい」

「私もいつか飛べるようになるかしら？」

(分かっている、私は決して飛ぶことなどできはしない)

「ねえ…知ってた？実は私も飛べるのよ」

やがて私は立派な建物の前に到着した。

巷で有名な新興宗教の総本山。

或いは、巨大な大学病院。

禍々しい程に白い建物の中央には高く聳え立つ時計塔。

時刻は午前0時をさしている。

空は明るく、夕暮れ時とも見間違えう程。

この屋上から。

今夜、彼女は飛び降りる。

彼女の話 2

彼女の知り合いに子供が生まれた。

母親は子供をとても可愛がっていたのだけれど、ある日突然この子は自分の子ではない、偽物だと言い出した。何故そう思うのかと聞いてみても、偽物にすり替えられている、母親の私だから分るの一点張りで埒が明かない。

周囲は育児ノイローゼだろうと思いきやそれとなく見守ることにしたが、少し目を離れた隙に母親が子供を絞め殺そうとする事件が起きた。

幸い大事には至らなかったが、母親は誰の説得にも耳を貸さない。子供を目の前になると恐慌状態に陥り殺そうとする。仕方なく両者を引き離し、子供は親戚が引き取って育てることになった。

その後母親は子供だけではなく家族・親類の一部・知り合いまですり替えられていると思ひ込むようになり、ほとんど部屋に閉じこもって生活しているという。

子供は誰が見ても普通の子供で、今は親戚の家から学校に通っている。

彼女は、私も偽物にすり替えられてるって言うんだよと笑ったが、実は私も、彼女が偽物にすり替えられているのだと思っている。

観測者

あるところに、誰かが自分を見ている、という恐怖を抱いている人がいた。

最初は、一人で風呂に入って頭を洗っているときに視線を感じるといったような類の、他愛もない妄想だった。

彼は風呂に入っている時だけではなく、常日頃から四六時中、一人でいる時はずっと視線に怯えていた。

自室にいる時もずっと。

そして、この恐怖から逃れる為には己の部屋に監視カメラをつけるのが良いと思いついた。部屋の中に監視カメラを複数取り付けて、常に自分の背後をモニターで監視できるようにした。

昔、世界は人間が観測することによって決定されると考えた人がいる。つまり、観測していない時に何が起きているかわかったものではない。だから彼は、動くものは自分以外ない画面を見て安心する。大丈夫、自分の後ろには何もいない。

しかしそうなると今度は部屋の外が気になる。彼は小さいながらも一軒家に一人暮らしだった。部屋にいと廊下が見えない。廊下は誰にも観測されていない状態である。観測されていない場所では何が起きているかわかったものではない。廊下にも監視カメラをつけた。モニターは増える。彼はモニターを確認して安心する。大丈夫、観測しているのだから何もいないことは決定している。

しかし新たな不安が生まれる。カメラに映っていない場所、死角は誰にも観測されていない。死角で何か起きているのではないか。更に監視カメラは増える。どうしたところで死角はできる。またカメラを増やす。モニターが増える。そのうち彼の部屋はモニターで一杯になった。彼はモニターを見て安心する。大丈夫、観測して

いるのだから。

そんな日々が暫く続き、何時ものようにモニターを眺めていると、視界の隅に何か妙なものが映ることに気付いた。

それは正面からみようとするとすぐにモニターの外へ出てしまう。しかし、別のモニターを見てもそれらしいものは映っていない。

視線を感じる。

モニターに背を向ける。

視線を感じる。

誰かが自分を見ている。

どこだ。

どこから

全てのモニターに自分が映っていて、沢山の自分が、モニターの外にいる彼を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1155t/>

いつかみた夢

2011年10月9日02時44分発行